

グローバル・シフトと大学教育のパラダイム

— 学生と教職員で作るスピリチュアル・キャピタル —

恒松直美

はじめに

現在、事象を捉える現代科学の枠組みをはずし、新しい世界観に基づいて新しいパラダイム¹で世界を捉え直す動きがある。パラダイムをシフトさせることで今後人類が目指すべき新しい方向性を探る学際的研究も発展しつつある。例えば、Bourne (2008)は、「グローバル・シフト」(‘global shift’)²と題し、現在世界観が現代科学に基づいた物質主義を重要視する視点から精神性を重視する視点へと変化し、新しいパラダイムで事象や世界を捉える動きがあることについて論じている。つまり、世界を捉えるパラダイムを今「シフト」しなければ、今後地球を存続させることは困難であるという視点に基づいた議論の展開である。現代科学の枠組みにおいて唯物論的世界観に基づき経済的効果を重視した世界観によって、自然のリズムと調和は軽視され、意識・意思・感情などの目に見えない精神的・心理的側面は軽視または無視されてきた。その結果として人類につきつけられた多くの問題は、無視できない状況にまで深刻さを増してきた。パラダイム・シフトの問題は、未来の「人」を育てる大学教育においても重要性を持ち、現在盛んに議論されている大学改革や大学国際化の問題の取り組みにおいても、核となる問題であると考えられる。経済のグローバル化と共に国際的競争力を問われることとなった日本の大学は、国際的視野から新しい施策に取り組まざるを得ない状況にあるが、その取り組みにおいて大学教育のパラダイムの問題は核となる問題である。本稿では、グローバル・シフトが提唱される現在、日本の大学教育のパラダイムはどうあるべきなのか、新しいパラダイムで国際的視野から大学に構築できるスピリチュアルキャピタル(‘spiritual capital’)はどのようなものであり得るのか、その可能性について考察する。

大学の教職員と学生：ホリスティックな存在としての関わり合い

¹ Structure of Scientific Revolution (1962)において Kuhn(1992-1996)が、科学の歴史は常に累積的なものではなく断続的に革命的変化する、すなわち「パラダイムシフト」が生じると指摘した。その後、「パラダイム」の概念が科学史・科学哲学・社会科学など広範囲に多義に使用されるようになり、その定義について議論された。本稿では、「パラダイム」を「理論的枠組み」「概念的枠組み」「認識のしかた」という意味で使用する。

² グローバル・シフトとも関連したスピリチュアリティの学際的研究については、例えば、恒松(2008)参照。

グローバル・シフトの議論が進められる中、大学教育におけるスピリチュアリティの問題についての研究も発展しつつある。大学に所属する学生は日々多くの要因に影響を受けながら変容し、学生を取り巻く教職員もまた、日々多様な側面から影響を受けながら変容し続けている存在である。大学というコミュニティは、生きた存在である学生及び教職員が日々互いに影響を与え合いながら成長していく動的な「場」と同時に、時間と空間を超え多面的なつながりの中でホリスティックに皆が影響を与え合う「場」である。つまり、大学は、大学に所属する学生のみが一時的に影響を受ける場としてのみではなく、アカデミズムの枠組みを超え、学生と教職員とそこに関わった人々がつながり、社会と連携し、生涯にわたって相互に影響を与え続ける場として機能しているのである。そして、大学教育を通じての自らの体験は、学生が社会に出た後も、学生が関わっていく人々に影響をもたらす、その社会と世界への関わり方に大きな影響をもたらしていく。Mandell & Herman (2009: 339)は、大学教育の意義について、「大学を超えた世界に影響を与えるために大学で学ぶ」と主張する。

人はどのような大学教育のパラダイムにおかれ、どのように影響を受けているのであろうか。そしてその影響は後々の学生の世界との関わりにどのように関与しているのであろうか。大学におけるスピリチュアリティの重要性とそれが大学というコミュニティにもたらす影響について考察するにあたり、「スピリチュアル・キャピタル」という支援体制の可能性に着目した時、これまで見えなかった大学の価値と相互の影響が浮かび上がってくる。大学に所属する学生及び教職員のスピリチュアリティの問題を取り上げた研究はまだ少ないが、学生のインタビュー³を通じ、そのスピリチュアリティの重要性に気づかされる日々である。

スピリチュアル・キャピタルの定義について、Zohar and Marshall (2004: 3)は、「人生の深い部分を豊かにする富」であり、深い意味と価値・最も基本的な目的・高い動機を、人生と仕事に深く関連づける方法を見つけることにより得る富である、と述べる。さらに広い視野からは、「コミュニティやグローバルの概念の広い枠組みにおいて、組織と文化の持続可能性のための先見性とモデルである」と定義する。つまり惑星や人類といった大きな視野から自身と組織のあり方を見つめ、共有できる意味と価値のある目的に向かい、人間としてその生の意味と究極的な目的についての視点を持つことである(Zohar and Marshall 2004: 5)。そこで重要となるスピリチュアルな知性とは、深い意味・価値・目的と高い動機へとアクセスするための知性であり、思考や意思決定・価値付けを行っていく知性である(前掲)。

³ 現在、「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題し研究を進めている。大学生へのインタビューから、学生が日々自分の生き方と将来について自分に問いかけ、社会とのつながりを求めて模索している姿が浮かび上がってきた。インタビューでは、話し始めると普段人に語らないかなり深い内面を語る学生も多く、深い質的調査の重要性も認識できた。

大学の知の価値については多く論じられてきたが、スピリチュアル・キャピタルとしての価値とその可能性や大学支援との関わりについての議論はまだ少ない。「大学教育」については、教育理念・教育方法・カリキュラム・制度・大学の国際化及び国際比較・大学経営など、大学という制度の存在のあり方に関連した研究は多くなされてきたが、大学コミュニティを「生きたホリスティックな存在」の集合体として捉え、学生と教職員の「生」の視点から大学のあり方を考察した研究は、あまり発展していない。どのような職に携わる人間も、「職場での仕事」の背後に自分の人生を抱えており、実はその背後の部分と仕事とを完全に分離することはできない。大学というコミュニティに属する人間も同じく、そこに自身の人生と生き方の問題を背後に抱えながら日々の仕事に従事している。人は日々自らの人生の「意味づけ」を行っており、一日のうち主要時間を占める職業とその意味づけは切り離すことができないのである。

学生を取り巻く教職員の「自らの人生の意味」に対する態度が、大学という文化の中で交錯し、相互に影響し合いながら、学生と教職員の生き方と人生に影響を与えている。また、教職員も、大学という文化の中で学生に何をもたらすことができるのか、それにより社会に自分は何をもたらすことができるのか、を模索し変容している場合も多い。大学はグローバル性とローカル性を兼ね備えた場であり、大学である以上兼ね備えているべき国際性の特質とともに世界の縮図として機能する場である。そこでは、文化や言語による境界線のない人的資本を形成できる可能性は拡大する。知の普遍性を持つアカデミズムに基づくからこそ構築可能な大学コミュニティがあるのであり、そこで形成されるスピリチュアル・キャピタルの可能性は無限である。人が日々生きていく上で根幹となるスピリチュアリティの概念について理解を深めるため、まず、人間の持つ「スピリチュアルペイン」の問題から取り上げる。なぜスピリチュアリティが無視できない問題なのかについての概念化を明確にしたうえで、学生と大学教育に関わる教職員のスピリチュアリティの問題について言及していく。

スピリチュアル・ペイン：「ホリスティックな存在」としての人

医療の分野におけるスピリチュアリティの問題への取り組みにおいて使用される、「スピリチュアル・ペイン」「スピリチュアル・ケア」という用語がある。死に直面した患者が人間としての存在価値を問う姿は、現代医学に基づく身体的・心理的側面からの治療のみでは人間を捉えきれないことを示している。人はホリスティックな存在であり、医療にはその理解が必要であるとの見解が医学においても顕著になりつつある。帯津(2008: 24-25)は、これからの医療は、霊性(スピリチュアル)⁴に注目すべきであり、今後世界的に健康や人間に対する意識が変化し、

4 「スピリチュアリティ」を「霊性」「精神性」と訳す研究者もいる。‘spirituality’の日本語訳による折り合いの悪さと微妙な感覚のずれについてはしばしば指摘されている。「スピリチュアリティ」「スピリチュアル」という用語によって伝わるニュアンスについても注意が必要である。「スピリチュアリティ」の定義については、例えば、恒松(2008)などを参照。

新しい認識が生まれると論じる。そして「霊性」の重要性を認識しながらも、その宗教的な響きへの懸念から、医学においてその使用を避けていた自らの体験を述べている。さらに、WHO（世界保健機関）憲章前文の健康定義について、平成10年に「霊性」という言葉が付加される方向でWHO執行理事会で採択されたことを述べ、身体・心・社会福祉的なことに加え、「霊性」「生命」に焦点を合わせる必要性にWHOや世界が向いていることに触れつつ、自らの霊性の重要性への確信の気持ちを述べている。WHOの新しい健康定義は、「健康とは、身体的、精神的、社会的かつ霊的（スピリチュアル）に完全なひとつの幸福のダイナミカルな状態をいうものであって、決して単に病気や障害の不在を意味するものではない」（帯津：2008：25-26）というものである。これは、「生きる」とは何かを再考し、地球規模で世界のあり方を共に捉え直すとする新しい動きとも連動しているのではないだろうか。帯津(2008:26)は、霊性、つまり靈魂とは、生命場そのものであり、「霊的に幸福」とは、「生命場のエネルギーが高い状態」とであると主張する。

帯津(2008:161-162)は、近代西洋医学が、「医学は科学である」という前提の下に発展してきたが、「医療は科学ではない」と論駁する。つまり、「医学」と「医療」は別であるという見解である。医学は医療の一部であり、医療は科学では解決せず、科学が人間の生命すべてを解明したわけではないとの見解に立つ。私達が「生きていくこと」は非科学的なことで大部分が占められており、私達がいろいろなことを考え自己実現のために生きていることに、科学が入り込む余地はない、つまり人間とは「非科学的存在」とであると定義する。現代という時代は、科学的でないことや科学で証明できないことは存在しないものとして捉える物質主義的な世界観を形成してきたが、このような唯物的世界観によってもたらされた問題はあまりに大きい。科学で物事や事象をすべて解き明かせるというアプローチに基づくと、未だ科学的方法により目に見える形で測定できていない、人間の真髄にある「スピリチュアルペイン」は、存在しないことになる。

人間の苦悩を「全人的苦痛」(total pain)とした場合、その苦痛を「身体的苦悩」・「精神的苦悩」・「スピリチュアルペイン」・「社会的苦悩」の四つの側面から捉えた見解がある(杉岡 2009、淀川キリスト京病院ホスピス編 2007:38 を参照)。医学においてスピリチュアルケアに関する議論の発端となった出来事として、現代的ホスピスの創設者である Cecily Saunders が、1967年にロンドン郊外に、聖クリストファーホスピスを設立し、末期患者の苦痛を、「身体的、精神的、社会的、スピリチュアル」という四要素からなる「トータル・ペイン」として捉えた出来事がある(村上 2008: 95-108)。「身体的苦悩」は痛みなどの身体症状、「精神的苦悩」は、不安・いらだち・孤独感・恐れ・うつ状態や怒り、「スピリチュアルペイン」は、人生の意味への問い・価値体系の変化・苦しみの意味・罪の意識・死の恐怖・神の存在への追求・死生観に対する悩みなどに関する苦悩を指す。「社会的苦悩」は仕事上や経済上の問題・家庭内の問題・人間関係・遺産相続の問題などを指すものとして分類される。四つの苦悩のうち、「身体的」と「精神的」な

苦悩について述べられることは多いが、「スピリチュアリティ」の苦悩は、人間が奥に秘めた苦悩でありながらも、「非科学的」であるという見解から軽視されてきた。その意味の深さと人間の生との深い関わりについては、科学的根拠の提示が困難であるため、軽視されてきたのである。実はかなりの重みを持って多くの人間にのしかかる問題でもあり、心の拠り所でもあるが、あまりに不可解であり「非科学的」との見解により、語ることを避ける場合が多く、医学においても正統な理論的枠組みにあてはまらないため、正面からは取り込まれにくかった。

窪寺(2008: 59)は、「スピリチュアルペイン」を「超越者との関係の欠如、究極的自己の喪失などが原因で、病気の中でのわたし[自分]の生きる意味、目的、価値の喪失などからくる虚無感、無力感、疎外感、喪失感、怒り、いらだちなど」と定義する。日常よく使用される「心理的苦悩」が「人間関係における不適応や葛藤に根ざしている」のに対し、「スピリチュアルペイン」は、「人生の目的、苦悩の意味、死後のいのち、罪の意識からの解放」であると窪寺(2008: 35-36)は定義する。つまり、心理的苦悩が「人間関係的」原因で起きているのに対し、スピリチュアルペインは「実存的問題」に悩むことが原因であるという。さらに、村上(2008: 103)は、スピリチュアルペインは、死の恐怖にさらされている人のみの問題ではなく、青少年を含む健常者であっても抱くことのある、生の無意味、アイデンティティ喪失などの問題であることを、村田(2002)の言説を参照して説明している。

スピリチュアリティに対する学問的正統性が議論される中、医学におけるスピリチュアルの問題をこれから医学の道を目指す学生への医学教育においてどう伝達するかも重要な課題である。杉岡(2009: 23-42)は、医学教育においてスピリチュアリティに関する講義を行うことの意義について、人の魂(‘spirit’)は人間の持つ本質・真髄(‘essence’)であり、人としての全体(‘wholeness’)を構成するものであると論じる。つまり、身体・心理的・スピリチュアルの側面を見て初めて人を包括的にホリスティック(‘holistic’)に理解できるのである。人が、人生の意味の探求をする内面を持つ事実を、医学を学ぶ学生が理解したうえで医学・医療を学ぶ重要性を説いている。

杉岡(2009: 23)は、日本の医学教育においてスピリチュアリティについての講義が必要である理由として、以下の3点を挙げている。1) 患者、特に死に直面している患者にはスピリチュアリティに関する欲求がある、2) 日本の現代医学の教育においては、スピリチュアリティについての講義はあまりなく、患者を診断し治療するための生物医学及び臨床の技術についての知識修得が重要視されている現状がある、3) 医学教育におけるスピリチュアリティの講義は、医学に普及しているニヒリズムを学生が理解し、学生に人間の尊厳についての基本的理解を与えることができる。このようにスピリチュアリティの問題は人をホリスティックに捉えるうえで無視できないとの見解が、医学の臨床や研究においても示されてきている。捉えにくさゆえに取り込まれにくく、実証の困難さにより科学と分離されがちであったスピリチュアリティの問題は、実は人の生の根幹となるものであり、「自らの生」にどう向き合うかに関わる根源的問題といっても過言ではないことが分かる。このように、心・意識・精神・愛といった実は目に

見えないものが人間の根幹をなしている現実を軽視してきた結果現代社会にもたらされた問題を問い直す姿勢は、グローバル社会において大学が新しい方向性を模索する過程で一目おくべきである。グローバルシフトの視点は、日本の大学が、学生のための支援体制を構築し世界につなげていくことを目指す時、忘れてはならない課題であると言える。

大学におけるスピリチュアリティの研究：学生のスピリチュアリティ

学生のスピリチュアリティの実存的問題についての悩みを大学教育の中で真剣に取り組み共に考える機会が、大変稀である。大学時代に多くの学生は無意識に自分のアイデンティティを模索し、近い将来訪れる学生生活の終焉とこれから新しく出て行く社会にどう自分が向き合うべきなのか、「自分探し」をしている。まだ自分がこれまで身をおいたことのない「社会」で「自己」をどう表現していくべきなのか、「自分」はいったい何者なのか、世界に向けて自分は何ができるのかを、日々考えている。大学時代は、社会との接点を目前に控え、教育機関での長い「学生」の期間を終え、「社会人」として新しい世界に「自己」を移行させる準備をする変容期でもある。このような状況の中でスピリチュアルペインを感じるのは当然であり、それを大学生との対話の中で感じることは多い。

思春期は、多様な価値感の中で揺れ動き、自分が信じていた一つの基盤となる価値感から他の価値感への大きなシフトを経験しやすい時期でもある。それまで抱いていた価値感を超えて、混沌とする中で何かそれまでとは異なる価値感を自分の価値感とする意識変容が起こりやすい時期でもある。このことについて、Love (2001: 10)は、それまで自身の拠り所としていた権威から離れながらも新しい自己の価値感がまだ確立していない状況において、それまで信じてきた価値感を維持できないと感じる思春期の心の揺れについて述べている (Parks 2000 参照)。

このように価値感が揺れ動きながら自己を探求する状況において、自分の居場所が大学から社会へと移行していく時期に持つ体験は、その後の人生や社会との関わり方に大きく影響する。例えば、Dalton (2001)は、大学時代のスピリチュアルな探求が、大学の枠を超え、仕事やコミュニティにおける生き方に及ぼす影響について研究を行っている。スピリチュアリティの問題は、ある一定時期の問題ではなく、生涯をかけて探求するものであり、終わりのない探求であるとも言える。Dalton (2001: 17)は、人生をかけてのスピリチュアリティの探求は、青年期から成人になる過渡期にその最盛期を迎えると言う。人生の目的を見つけるため自身の内面のありかを模索する意味から、大学の時期は、多様な疑問を投げかけ、スピリチュアルな探求をする時期であると述べる。

スピリチュアリティがかなり内面の個人的な部分の問題として認識される傾向にあるため、スピリチュアリティが大学生の学びと発達に果たす重要な役割についての理解が欠如していることは往々にしてある。学生の将来の目標設定やキャリア選択においてもスピリチュアリティ

は重要な役割を果たす。しかし、現実には、大学教育において「スピリチュアルペイン」を公に語る場は存在しないといっても過言ではなかろう。公に表明することが、場合によっては目的意識の希薄性と認識され、学生本人の問題として捉えられることも多い。例えば、研究を主目的とする大学院等では、実際に抱えるスピリチュアルペインを表明することが研究意欲の低さとして評価されることに懸念を抱いている学生は多い。また、病的に捉えられることへの不安から、実際は、多くの学生が抱える問題であり、現実的に真剣に取り組む重要な問題であるにも関わらず、心に秘めたまま表に出さない学生は多い。現実には、学生は、自分のおかれたアカデミズムの環境と実社会との乖離で揺れ動いている⁵。実際の進路選択では、研究者になるよりもアカデミズムから実社会へと出て行く学生のほうが圧倒的に多い現状を考えると、アカデミズムの外の世界についての学生の心の揺れは当然であると言える。

大学コミュニティは、理論的研究と実社会をも包含したホリスティックな空間となり得る。実社会を包含することにより、学生の学びの意義は大きくなり、大学における理論的背景に支えられた実社会の理解も深まる。Love (2001:14) は、学生の、社会的活動、ボランティア活動、リーダーシップ、コミュニティ支援活動は、学生のスピリチュアリティの発達の顕れであり、また、学生が意味を見出せる活動を模索する姿の顕れであると論じる。学生生活が多忙になろうとも、これらの活動を通じて大学生生活に意義を見出した例は、実際の学生のインタビューでも明らかになっており、その理由として、自分と社会の人とのつながりを見つけ、自分が何かを社会に貢献したことに意義を見出していることが挙げられる。また、実際に社会で活躍する人とつながることで、大学の学びの活かし方が見え、また自分の存在価値を確認できるのである。では、ホリスティックな学びのコミュニティはどのようにして作れるのであろうか。その鍵として、学生のスピリチュアリティのみでなく、大学コミュニティを構成する教職員のスピリチュアリティの問題について考察してみたい。

学生支援に関わる教職員のスピリチュアリティ：職業と人間の関わり

Briskin (1998: xii)は、組織において人間の持つ魂 (soul) への挑戦を探求することとは、経験について個人的・主観的・無意識的要素を持つ個人の世界と合理性・効率性・個人の犠牲を要求する組織の世界との橋渡しをすることであると言う。人の内面における「個人」としての自分と「組織」における自分との境界線は、表面上の区別は存在しても、実は曖昧なことが多く、「個人」の持つ人生への動機が、「組織」にどう関わり、どう貢献していくかに密接に関わっている。人間は、組織に所属する際、「個人」であると同時に組織のメンバーであり、一人で

⁵大学生へのインタビューから、学生の進路や大学教育についての意義付けについての心の揺れは思っていた以上に大きいことが明らかになってきた。

いるときに組織を全面的に遮断できないのと同様に、組織内にいる際に個人としての「自分」を全く別の者として分離することはできない。つまり、「組織」と「自分」は自己の中に同時に共存している。

Manning (2001: 29-30, Morgan:1986参照)は、組織における仕事が機械的な繰り返しになりがちであり、雇用された者がその機械の一部としての機能を期待されている現状を描写している。仕事に従事する人間が、一人の人間としてではなく、職場に即した仕事のための構成員として機能するために就労する姿である。機械的な一部の職員として就労する場においては、人は、心・体・魂を持つ人間としての全体性(whole being)として自身を表現することができず、またすべきでないとき、そのスピリチュアリティを放棄し、組織のメンバーとしての基準を満たす労働者として労働する。競争という手段に基づき利潤を追求する組織の目標のために、一人の全体性を持つ人間としての自分を捨て、労働を給料に変える。その労働は、喜びや達成感、ポジティブな自己感といったものはほとんど無縁である。このような自己と仕事との分離を強いられる環境におかれた時、「人」が自分の力を最大限に発揮し、組織の目的達成のために尽力しようという心境になることは困難である。「仕事」は自分の生活手段のためのみの場所になり、「自分」を表現し可能性を発揮する場ではなくなるのである。

職業に携わる人間が、仕事と自分をどう捉え、日々の自身の仕事を社会の中でどう位置づけ、それが人や社会にどう影響すると捉えているかは、仕事への使命感と仕事への意欲を決定づける。しかし、このような問題に真剣に話し取り組む職場は少ない。現実的には、生きている人間が携わる職場で、生きた人間の持つ日々の意義付けとその動機に基づく行動が周囲に与える影響はあまりに大きい。ましてや、大学という学びの環境から社会へと出て行く学生が学ぶ大学という場における影響はあまりに大きい。

Manning (2001: 32)の、人間とは意味づけをする生き物であり、常に人生において意味を創造することに枯渇している、という指摘は、学生生活においてもキャリアにおいても、人生の道においてあてはまる。その「意味」を失い、自分の日々遂行していることの意味が不明瞭になった時、喪失感にさいなまれる。この問題は、大学における教職員と学生双方に起こる問題とも言える。学生支援に携わる教職員が、「自分」に何ができるのか、「自分」は大学・学生・社会に何の役割を果たし得るのか、それが学生に何をもちたらし得るのか、についてどう捉え、どう行動に移すかが大学の運営を大きく変える。それは、個人の自己実現の問題でもある。大学とは、未来を創る学生のために、何かを貢献し影響を与え得る場であり、そのためのコミュニティへの所属に意味づけができるかどうか、大学コミュニティを発展させていく糧となる。Love(2001: 14)は、学生支援に関わる職員が自身のスピリチュアリティについて熟考することの重要性を説くが、職員の目的意識、方向性、関係性、コミュニティへの所属意識などの意味づけは学生に日々影響をもたらしている。

このように、スピリチュアリティの問題は、学生のみでなく、学生支援に関わる教職員の間

題でもある。どのような職場においても、その職員が持つスピリチュアリティがそこに関連するすべての人に影響を与えている。新しい知を生み出し、常に世界との新しい関わり方を模索するコミュニティを形成する「大学」という環境において、学生の学びに深く関わり、日々その支援を行う教職員のスピリチュアリティが学生との関わりにおいて大きな影響を及ぼしていることに議論の余地はない。

Zohar と Marshall (2004:38-39) は、一つの根本となるパラダイムが、その人の行動のすべてをつかさどるパラダイムとして機能していることを指摘する。つまり、事象への前提・価値・抱負・戦略・関係・感情・行動のすべてをその「動機のパラダイム」が決定づけていると主張する。その動機パラダイムが、思考パターンをもたらすのである。したがって、大学というコミュニティにおいて教職員の持つ動機のパラダイムによって、まず大学教育及び学生への対応や関わり方への思考パターンが形成される。そして、それがその大学コミュニティの文化となる。Zohar and Marshall (2004: 38-39)は、動機の尺度⁶をどう移動するかが、その人の行動のパラダイムを決定すると述べる。基本となるパラダイムの変化なしに行動の変化はないのである。

したがって、大学コミュニティにおいて各教職員が行う職務が日々どのように学生と大学コミュニティに影響を与え、何を将来もたらし得るのか、また、それが将来的にグローバル社会に何をもちこたし得るのかについて、それに携わる教職員の動機のパラダイムが、行動として現れるといえる。動機を明確に持ち意義付けをしていなければ、大学の掲げる大学の国際化戦略への反応は薄い。今、大学コミュニティは、グローバル社会と大学の国際化を回避できない状況にある。教職員と学生がどう関わり、何を将来ともに作れるのかについての明確な動機付けがなければ、変化は起こりにくい。大学に所属する「人」が大学の国際化にどう「意味づけ」をし、それにより自分をどう動機付けするかが、根本的なパラダイムとしてすべての行動に影響する⁷。グローバル・シフトの視点から大学教育のパラダイムを考察する時、基本となるその動機のパラダイムの問題に取り組む必要があることが分かる。次項において、大学教育支援への動機のパラダイムとそれに関連する大学におけるスピリチュアル・キャピタルの可能性について論じる。

大学時代の体験による意識変容とその影響：スピリチュアル・キャピタルの重要性

⁶ 動機の尺度の詳細は Zohar and Marshall (2004: 38-39) 参照。動機の尺度として、崇高な要求である生産性・啓発・内なるパワー・人への貢献などの 8 段階と、負の要求である怒り・自己主張・渴望・無関心などを含む 8 段階を提示している。

⁷ 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト」(p.2 脚注 no.3 参照) の研究において、人がどのような体験を通じて意識変容するかについて明らかになりつつある。大学教育経験者及び多様な職業に携わる人々にインタビューし、深い質的調査を行っているが、転職や企業を途中で退職するケースなどでは、仕事への「意味づけ」と「動機づけ」が大きく揺れ動いていることがわかってきた。核となる「意味づけ」の部分が揺らいだ時、人は自身の行動のすべてに影響を受けるといっても過言ではない。

Zohar&Marshall (2004)の取り上げるスピリチュアル・キャピタルという概念を認識しつつ現在の大学資本主義(‘academic capitalism’)(Shahjahan 2005: 691, Slaughter and Leslie 1999参照)を捉える時、現在の高等教育が陥りがちな施策の方向性と、未来を作る学生のために高等教育機関で何を目指すべきかを、より大きな枠組みの中で捉える視点に気づかされる。自己と世界・地域コミュニティとのつながりの中で大学・個人はどうあるべきなのか、といった人間としての根源的問題を見つめる目を持つことができる。例えば、Slaughter and Leslie (1999: 686)は、西洋主義を中心とするアカデミズムと世界観の中で学生の核(‘center’)となるスピチュアリティが軽視または無視されてきた現状を批判し、西洋アカデミズムで主要となる議論は、世界を構成する人々の多様な社会・宗教・言語・民族性・歴史・価値感を反映していないと論駁する。世俗的な思考に基づき、自身の歴史とスピリチュアルな世界観と生き方を否定する、自分のアイデンティティの核を排除した学識には意味がないと論じる。大学での西洋主義に基づいた知識の伝授では、自分の核となるスピリチュアリティには触れず、自分の存在が縁辺に追いやられていると述べる。このようなアカデミズムへの批判的見解も認識した上で、今日大学が直面している問題について考察してみたい。

大学資本主義とは、20世紀末のグローバル化により、大学における職業の従来の伝統的なあり方が弱体化した様相を指し、最近の高等教育が目指し掲げる施策の方向性の問題として指摘される。グローバル化は、市場的な視野からの高等教育の有用性を強調し(Shahjahan 2005: 706, Slaughter and Leslie 1999: 24参照)、組織及び教員も国家の経済活動のために職務を果たし学生の人材育成を行う施策を打ち出すことを要求してきた。大学資本主義により、現在、大学は、企業を模倣し、功利主義を強調し(Slaughter and Leslie 1999: 693)、市場をターゲットとして効率的に知識を生産し普及させることに主眼を置くコスト効率的ビジネスモデルへと移行している(Slaughter and Leslie (1999), Buchbinder & Newson, 1992: 15 参照)。近年、大学の国際化が、経済効果を生み出すことに焦点をあてて議論される傾向にあるが、経済効果を主眼とし人材育成に焦点をあてて進める国際化には、生きている意識を持つ「人」への視点が欠落しがちである。大学の国際化や留学生の増加政策を、経済的有効性や経済発展のための「人材育成」の視点から捉えるのではなく、広い視野から多面的に世界や人を理解できる人を育てる視点から捉えた時、「人が生きること」を中心におき、多様性の中で国の枠を越えて相互に視点を尊重し、人が社会とつながりを持ちながら共存していくことに視線を向けられる教育へとパラダイム・シフトする。つまり、現在起こっているグローバル・シフトの視点である。その見解から生まれるのは、大学における「人」の教育を、「人」で構築するスピリチュアル・キャピタルによって支える支援体制の構築である。それにより支援する側もされる側も動機のパラダイムはシフトする。

例えば、Manning (2001: 32)は、学生支援に関わる教職員が、自分自身が学生時代に個人的に変容した体験によって、自ら多様な教育支援策に関わるようになることと述べる。学生時代に誰か

から感銘を受け、それが故に、自分も同じように他の人の人生に関わりたいと強く切望するようになるという。このような例は、実際のケースとしてもあった。例えば、自分が大学生だった時、大学職員に真剣に相談にのってもらい支援を受けた経験から、自分も大学の職員になることを決めたというケースがある。また、留学生教育や留学生支援に深く関わり発展させようとする教職員は、たいてい自身が留学経験を持ち、海外生活を通じて多くの人に支援された体験により、自らが受けた恩恵とその体験の意義を、学生の未来の創造に役立てようとする場合が多い。

Manning(前掲)は、スピリチュアリティの表現を大学のキャンパスで困難にしているのは、アカデミアにおける、学部や専攻、専門分野の細分化であると論じる。大学で得た知を現実的に社会で生かしていくためには、細分化された学問の枠を超えて学際的に事象を考察でき、また知識構築のあり方を柔軟かつ批判的に見られる目を養う教育を提供する必要がある。そのために、学際的知識の宝庫である大学というグローバルなコミュニティを最大限に生かせる学びの場を提供する視点が求められているのである。自分は社会とどうつながっていけるのか、どのように自分を生かしていけるのかについて考え、知る場が必要なのである。そのための支援のしくみとして、メンター(mentoring)制度の構築が考えられる。例えば、学生にとり最も価値のある学びは、教員と少人数の学生グループとの関わりによって起こるという調査結果がある(Parks 2000: 127, Light: 1992を参照)。青年期は自分探しの中で、自分と他者や社会とのつながりを模索する時期であり、社会に出る時期を目前に控える大学においては、メンターとの関わりが、学生のその後の人生に大きく影響するのである。

健康的な文化環境でのメンターとは、青年期にある者の可能性ともろさを認識できる人達であり、コミュニティであり、場所・状況である(Parks 2000: 212)。しかし、現実的には大学教員に要求される学究的な業績と経済的有効性という側面からは、メンターとしての役割を果たすことについては、多くの教職員が躊躇しがちな現実的問題がある。Parks (2000: 127-128)は、メンターによる支援が、学生の目的形成や将来への信念といったものに大きな意義を発揮するものとして機能することへの理解が不可欠であると主張する。知識は精神的側面を持つものであり、メンターからの支援によって、より知識を活かし、人生の意義付けをし、また人が変容するほどの力になり、人生に影響するのである。メンターの存在はそれほど価値のあることであり、メンター制度を作ることは、大学のスピリチュアル資本の一つなのである。

結語

「大学」というコミュニティを一つの多面的につながりを持つ「世界」として捉えた時、多くの支援体制を築ける可能性を持つ場であることに気づかされる。近年は、留学生数の増加政策をとる大学も多く、大学には教職員と学生によって構成されるグローバル社会の縮図が形成

されつつある。将来大学を出て実社会でいやがおうでもグローバル社会に直面する学生のために、大学というグローバルコミュニティを最大限に生かした学びの場を提供していくことがこれからの大学には求められている。大学は「知的普遍主義」(intellectual universalism)及び「知的国際主義」(intellectual internationalism)という理念を包含する場所であり(江渕 1997: 139; 喜多村 1989: 13-15)、その理念に基づき、いかなる文化的背景を持つ学生も、その多様性を尊重され、普遍的知識に貢献し得る場である。学際的研究の発展や事象を新しいパラダイムで捉えようとする前進的な動きさえも包含し、普遍的価値を探求する大学という場においては、国境や文化を越えて学生及び教職員が連携し、各自持つ多面性を生かした支援体制の構築が可能な文化的土壌がある。今日多くの大学が掲げる大学の国際化という目標を実現する過程において、新しい普遍的パラダイムで世界を捉えようとするグローバル・シフトの動きは、組み込まれるべき視点であると言える。

大学国際化や大学経営及び学生支援体制の改善の議論において、学生と学生を取り巻く教職員のスピリチュアリティと仕事に対する動機のパラダイムが取り上げられることは大変稀である。必要な支援策を提案し、大学間競争に勝ち抜くための戦略を掲げ、国際的舞台で活躍できる人材育成の必要性を説いても、その施策を遂行する教職員に動機のパラダイムがなければ実現は困難である。それを動かす「人」のパラダイムは施策の提示のみでは変容しないのである。学生支援を実際に動かし発展させていく原動力となるのは、大学コミュニティに所属する教職員が大学教育と学生に向き合うパラダイムであり、同時にそれに反応し、行動を起こす学生自身の動機のパラダイムである。また、大学と大学教職員に対して学生からの期待と信頼がなければ、学生の行動も鈍くなりがちである。「人材育成」という経済的有効性の視点のみでは、学生の学びへの意味づけと動機のパラダイムは作動しないことが多い。人は「内面から外へ働きかけ」を始める生き物であり、自分が人や社会に対してどのような意識を持つかが、仕事や学びへの態度として表れる。つまり、生きることへの動機のパラダイムが核となり、すべての場における行動につながる。大学の国際戦略や方策を動かすのはその人の持つパラダイムであり、原動力は、結局、「人」であり、人の持つ意識であることを忘れるべきでない。

大学で学生に支援を提供する教職員も学生も、一人の人間であり、日々自分の仕事や学びの意味について問いかけをしている。何を遂行するにおいても、その意味づけが揺らぐことは往々にしてある。職業に従事しつつも、仕事の意義をどう見出せばよいのか混迷の中にいる場合も多い⁸。学生と教職員の内面の現実を見つめたとき、大学がホリスティックに構築できるスピリチュアル・キャピタルの可能性とその必要性が理解できる。現在、大学は、留学生や外国人の

⁸ 例えば、主に企業体験者が受講している自己啓発セミナーに参加した際、参加者が職場では見せないアイデンティティを見せ、自己の生き方を語る姿を目の当たりにした。そこでは自身のスピリチュアリティに真剣に向き合い、自分の存在や仕事の意味について真剣に考え悩む姿もあった。

教職員の増加政策と共に、国際性を持つ支援ネットワークの構築を必要としている。大学という多様な文化的背景を持つ学生及び教職員が共存するグローバルコミュニティは無限の知的財産であり、国際的支援体制の構築の資産となり得る。また、そのグローバルな支援のコミュニティは、グローバル社会を学生が実際に体験する場ともなり得る。

大学とは、そこで仕事をする教職員と学生のスピリチュアリティが交錯する場であり、「人」の持つ可能性を生かしたスピリチュアル・キャピタルを大学コミュニティに構築することで、社会に出て行く学生に新しい道を切り開き、世界へとつなげる可能性は広がる。多くの学生にとり、大学は社会人になる前の最終的な教育機関であり、学生が社会とのつながりを求めて「自分探し」をする過程において大学コミュニティの果たす役割は大きい。大学で働くことは未来を作る学生に影響を与えることであり、将来の世界を共に創ることに関わることである。国境を越えて普遍的知識を構築し伝達する大学が今日果たし得る役割と国境を越えて大学教職員と学生とで構築できるスピリチュアル・キャピタルの可能性について模索し、未来の可能性につなげたいとの思いから、大学教育のパラダイムにグローバルシフトの視点を入れて考察してみた。

参考文献

- 江渕 一公 1997 『大学国際化の研究』 玉川大学出版部
- 帯津良一 2008 『大養生 – スピリチュアルに生きる –』 太陽企画出版
- 窪寺俊之 2008 『スピリチュアルケア学概説』 三輪書店
- 杉岡良彦 2009 「医学教育の中でスピリチュアリティに関する講義は必要か」 『旭川医科大学紀要（一般教育）』 第25号 pp.23-42
- 喜多村和之 1989 『大学教育の国際化 – 外からみた日本の大学 –』 玉川大学出版部
- 恒松直美 2008 「スピリチュアリティの学際的研究 – 近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆 –」 『総合学会誌』 第7号 pp.29-36
- 恒松直美 2009 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト – 大学教育経験者の意識変容についての研究法の考察 –」 『広島大学留学生センター紀要』 第19号 pp.11-27
- 恒松直美 2010 「短期交換留学生向けインターンシップと日本人学生の参加 – 国際的視野からのキャリア教育 –」 『広島大学留学生センター紀要』 第20号 pp. 23-39
- 村上信 2008 「ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する欧米と日本の文献の動向 – 2002年までの比較 –」 『実践女子短期大学紀要』 第29号 pp.95-108
- Bourne, Eedmund J., *Global Shift: How a New Worldview is Transforming Humanity*. Noetic Books, Institute of Noetic Sciences, Oakland, CA: New Harbinger Publications, Inc., 2008.

- Briskin, Alan , *The Stirring of Soul in the Workplace*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc.,1998.
- Dalton, Jon C., ‘Career and Calling: Finding a Place for the Spirit in Work and Community’, *New Directions for Student Services*, 95 Fall (2001) : 17-25.
- Kuhn,Thomas, *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago and London: University of Chicago Press, 1962.
- Love, Patrick ,G., ‘Spirituality and Student Development: Theoretical Connections’, *New Directions for Student Services*, 95 Fall (2001) : 7-16.
- Mandell, Alan and Lee Herman, ‘The Study and Transformation of Experience’, *Journal of Transformative Education*, 5 (4) October (2007) : 339-353.
- Manning, Kathleen, ‘Infusing Soul into Student Affairs: Organizational Theory and Models’, *New Directions for Student Services*, 95 Fall (2001) : 27-35.
- Parks, S., *Big Questions, Worthy Dreams: Mentoring Young Adults in Their Search for Meaning, Purpose, and Faith*. San Francisco: Jossey-Bass, 2000.
- Shahjahan, Riyad A., ‘Spirituality in the Academy: Reclaiming from the Margins and Evoking a Transformative Way of Knowing the World’, *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 18 (6) November-December (2005) : 685-711.
- Slaughter, Sheila and Larry Leslie, *Academic Capitalism: Politics, Policies, and the Entrepreneurial University* . Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1999.
- Tsunematsu, Naomi, ‘Connecting Students Transcending Gender and Culture: Paradigm Shift in the Internationalization of a University in Japan’, *Hiroshima Daigaku Ryūgakusei Kyōiku* [Journal of International Education, Hiroshima University], 13 (2009): 13-28.
- Zohar, Danah and Ian Marshall, *Spiritual Capital: Wealth We Can Live By*. San Francisco: Berrett-Kehler Publishers, Inc., 2004.

謝辞

本研究は「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」（研究者 恒松直美・文部科学省科学研究費 2009-2011 基盤 C21530881）の一環として進めている。

本研究費により、IONS(Institute of Noetic Sciences)主催により 2009 年 6 月 17 日～21 日にアメリカアリゾナ州・ツーソン(Tucson, Arizona)にて開催された第 13 回国際会議「グローバル・シフトに向けて：共同的転換の領域の育成」（13th International Conference “Toward a Global Shift: Seeding the Field of Collective Change”）への参加が可能となった。